ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第91号 2022年7月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 感染症と教育機関② ～仏教系学校と流行性感冒～	雨宮 和輝	2
逸話と世評で綴る女子教育史（91） ―兵庫県立神戸高等女学校の発展―	神辺 靖光	7
大東文化大学生の卒業生インタビュー ―大東文化大学『CROSSING』2023年から ―	谷本 宗生	13
明治後期に興った女子の専門学校（46） 東京女子体操音楽学校―女子体育専門学校のはじまり	長本 裕子	17
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書（16）：鳥取県議会における専攻科関係の発言（2）	吉野 剛弘	22
『校友』（松本中学校文芸部）第89号より その3 中島益男「矯風会報告書」	冨岡 勝	26
体験的文献紹介(39) ― 高校教育課程の研究から中等教育史の研究へ ―	神辺 靖光	30
刊行要項（2015年6月15日現在）		35
短評・文献紹介		36
会員消息		37

コラム

感染症と教育機関②
～仏教系学校と流行性感冒～

雨宮（あめみや） 和輝（かずき）
（早稲田大学）

2022年現在、国内外においても様々な出来事が起こっているが、新型コロナウィルスの感染が再び拡大している。確認したところ、去年の6月にも筆者はコラムの執筆担当であったが、今年になっても感染が完全に終息する気配はまだ見えていない。また、それに際して、去年のコラムを見返してみたところ、およそ100年前のスペイン風邪（本コラムでは流行性感冒と表記）[1]の拡大が、現在の状況と多くの部分で共通しているということに言及した。同コラムでは、教育機関において流行性感冒への対応がどのように行われたのかといったことに着目しており、師範学校の沿革史を中心にその実態に言及している。

しかし、その際のコラムでは、師範学校以外の沿革史等には流行性感冒に対する学校としての対応については確認することができなかったと述べている。実際、各学校の沿革史においては、流行性感冒に対する対応についての言及を確認することはできなかった。ただ、自身の宗教系私学に対する研究を行っている際に、宗教系学校、特に仏教系私学の感染症への感染実態やその対応に関する言及を見つけることができたので、本コラムでは、それについて言及するようにしたい。

流行性感冒への仏教系私学の対応が確認できたのは、仏教界の動向についての言及が詳しい『中外日報』であった。『中外日報』では、1918年頃からの流行性感冒が拡大し始めた頃より、その記事の存在を確認することができる。1918年11月8日の記事である「悪性感冒の猖獗」という記事では「名士の訃音頻々」として、西本願寺の首席勧学である熱田霊知と、島村抱月の流行性感冒による訃報が記載されている[2]。流行性感冒により島村抱月が亡くなったのは有名であるが、

ここで言及されている熱田霊知という人物は「京大文科大学並に佛教大学の講師」[3]であるとされている。佛教大学で講師として勤めていた人物が「二三日前より流行性感冒にかかり三日朝突如として示寂せり」[4]と記載されており、教員レベルの人間も流行性感冒に罹患していたことが伺える。

そして、『中外日報』において、京都の仏教系学校において、流行性感冒がどれ程流行っていたのかについて言及されているのが、1918年10月30日の「感冒と各宗学校」という記事である。京都において流行性感冒が蔓延していたというのは当時の『読売新聞』などでも取り上げられており、『読売新聞』の1919年1月20日の記事では「本年に入り該病にて死亡せるも二十五名に達し目下発病者日々二百名を算へつつあり」[5]と記載されている。1919年に入ってから京都においては流行性感冒が急激に蔓延していたことが窺える。それよりも前の時期に流行性感冒について言及している『中外日報』の該当記事を見ると、記事の冒頭では「這般の流行性感冒は全国津々浦々にまで猛威を振ひ殊に京都市民はほとんど大半感染し府南当局は之が豫防に全力を傾注し殊に学校等各種団体に対しては頃日来一層注意警戒せしめ居れり」[6]と述べている。京都においても、流行性感冒が猛威を振るっていたことが伺えるが、それに続けて、仏教系私学における流行性感冒の拡大について言及している。

記事を見ると「仏教各宗学校中感冒の惨禍最も甚だしきは洛西臨済宗大学」[7]であるとされている。臨済宗大学では学監から受付に至るまで感染し、学生においては一名を除いて全員感染しているような状況であったとしている。そして「稍軽きものは交代にて重症者の看護をなす始末にて授業は為に二十八日来休止し居れり」[8]として、軽症者が重症者を交代で看護するという、現在のコロナ禍でも見られたような状況や、授業が休止状態にあったことが言及されている。こうした惨状は、

臨済宗大学の沿革について言及している『花園大学三十年のあゆみ』を見ても記載されていない。

また、同記事では他の仏教系学校の状況についても言及されている。各学校において状況は異なっているが、以下、該当部分のいくつかの学校を取り上げると以下のようになっている[9]。

・「洛北大谷大学は一時多数の患者を出せしも昨今は大部分全快」

・「仏教大学は寄宿舎生中三四名を出し通学生としては約十五名同病の為欠席」

・「仏教専門学校は寄宿生二十三名を下らず全生徒の三分一強の感冒患者を出したれば此際積極的豫防として昨二十九日以来今月中一と先づ授業を休止せる騒ぎなり」

・「京都高等女学校は二十八日午後に於て七十五名の欠席者あり尚続続蔓延の兆候あり学校当事者は或は休校を宣して預防の実を挙げ一方校医をして日々診断をなさしむる等頗る混雑せり」

・「東寺大学は五六名の新患者」

以上のように、各仏教系学校において感染状況は様々であるが、大部分の学校で感染状況は厳しいものであったことがわかる。例えば、大谷大学においては、一時期は感染者が多くいたものの、この時期にはそのほとんどが全快したとされている。その一方で、佛教大学（後の龍谷大学）や仏教専門学校（後の佛教大学）では、寄宿生を中心として多くの学生が流行性感冒に感染している。また、仏教専門学校及び

京都高等女学校においては、感染者が多いために、授業を休止する、あるいは休校するといった措置を取っている。このように、各宗の仏教系学校において、程度に差はあれど、流行性感冒の感染があり、それに対して対処したという事実が確認できる。また、「中外日報」の該当記事では「此外各山住職及び本山役員中の大半は何れも此厄に会せざるものなき程の猛烈さにて尚益々病毒拡大の傾向なり」[10]として、学校だけでなく、本山や寺の住職も、流行性感冒に罹患していたことが窺える。

以上、本コラムにおいては、2021年のコラムの続きとして、『中外日報』の記事において確認することができた仏教系学校の流行性感冒の各学校の対応とその状況について述べた。2年連続で感染症と学校というタイトルにおいてコラムを執筆したことで、このコロナ禍が如何に長い期間続いているのかを実感することができた。それと同時に去年のコラムでは「各大学の沿革史においては確認できなかった」と述べたが、当時の新聞や雑誌といった資料には、学校レベルでの感染症の状況やその対応が記述として残っていることがわかった。去年のコラムでも言及しているが、今後、大学が沿革史を作成していく際には、大正期の流行性感冒を記載するとともに、3年目に突入したこのコロナ禍において、各大学がどのような対応をとったのか、また、どの程度の罹患者がいたのかといった内容は、明確に記載すべきであると考える。

（注）

[1]本コラムで取り上げる対象に関する研究である『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ　―人類とウィルスの第一次世界戦争』では、スペイン風邪という呼称については様々な呼び方があったことが言及されている。今年の本コラムでは、当時の呼称として新聞記事などで最もよく見られた「流行性感冒」を用いる。

[2]中外日報社『中外日報』「悪性感冒の猖獗」（1918年11月8日、5771号）1頁。

[3]中外日報社『中外日報』「悪性感冒の猖獗」（1918年11月8日、5771号）1頁。

[4]中外日報社『中外日報』「悪性感冒の猖獗」（1918年11月8日、5771号）1頁。

[5]読売新聞社『読売新聞』「京都でも千名餘の新患者死亡者続出」（1919年1月20日、朝刊）5頁。

[6]中外日報社『中外日報』「感冒と各宗学校」（1918年10月30日、5764号）3頁。

[7]中外日報社『中外日報』「感冒と各宗学校」（1918年10月30日、5764号）3頁。

[8]中外日報社『中外日報』「感冒と各宗学校」（1918年10月30日、5764号）3頁。

[9]中外日報社『中外日報』「感冒と各宗学校」（1918年10月30日、5764号）3頁。本文でも言及している佛教大学は後の龍谷大学、仏教専門学校は後の佛教大学である。そして、東寺大学とはこの時点では真言宗京都大学のことを指しているものと考えられる（真言宗京都大学はのちの種智院大学）。

[10]中外日報社『中外日報』「感冒と各宗学校」（1918年10月30日、5764号）3頁。

＊コラム欄では読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（91）
―兵庫県立神戸高等女学校の発展―

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

大正期、神戸高等女学校は発展の一途を辿った。県立高女にはほかに姫路高女ができたが神戸高女の優位は変らない。大正 3 年、第一次世界大戦が勃発すると日本は勝利者側について神戸は造船その他の戦時産業で好景気に湧き上がった。神戸高女の志願者数と合格者数をみよう。当時、当校の生徒定員は500、一学年 100 名である。常に学年定員の100 名を越えて合格者を決めねばならなかった。神戸とその周辺以外に公立私立の女学校はほとんどなかったから内陸や日本海沿岸方面からの入学者も多かったのであろう。寄宿舎満杯の状況がそれを示す。神戸高女は 5 年以後、定員を 600→700→750 と年々改正した。大正 3 年以後 3 年間と大正 9 年以後 3 年間の志願者と合格者をみたものが［表 1］［表 2］である。定員増加に合わせて合格者をふやしたにもかかわらず志願者はそれを上廻って増加した。この時期は戦後の不況が日本を覆った時期である。兵庫県でも富山県に触発されて米騒動が起り、神戸の大造船所でも大争議があったが円満に解決している。東日本の悲惨な状況と違って兵

表 1

大正	志願者	合格者
3 年	514 人	126 人
4 年	422 人	135 人
5 年	482 人	130 人

『神戸高校百年史学校編』による

表 2

大正	志願者	合格者
9 年	770 人	192 人
10 年	778 人	200 人
11 年	846 人	200 人

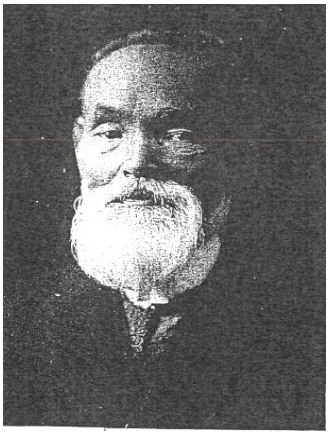
『神戸高校百年史学校編』による

庫県には活気があった。しかし神戸高女の志願者の増加は 11 年の 846 人をピークに減少に転じる。これは 11 年に県立高女が一挙に 8 校増加した効果であろう。それでも常に合格者の 2 倍以上の志願者があった。県外からの入学者もあり、兵庫県立神戸高女は神戸周辺の憧(あこが)れの高等女学校であった。

神戸高女の授業については記録が乏(とぼ)しい。カリキュラムは明治 34 年の「高等女学校令施行規則」の「五年制表」、大正 9 年の「高等女学校令中改正」とそれに基づく「施行規則改正」により 5 年制体制を維持した。またそれらによって大正 13 年、神戸高等女学校に修業年限 3 年の高等科（国文科、英文科）を設置した。

学校沿革史に授業科目の実践記録は見当たらないが年表にはそれが散見される。特に明治末年から大正初期にかけて桑園、苗園、花園、菜園の栽培作業や蚕の飼育が生徒の手によって行われた。理科の実験実習である。またマッチ工場やガス会社、造船場の見学も理科学習の一環として行われた。その点、神戸は地の利を得ていたと言える。また大正 7 年には校舎を改増築して家事博物教室、同標本室、地理標本室、生徒図書閲覧室等を新増設している。教師中心の授

図 1　神戸高女の基礎をつくった篠原辰次郎校長

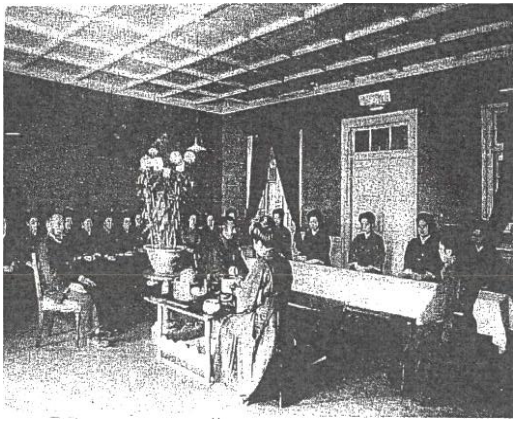


2 代　篠原辰次郎校長の略歴

1899（明治 22）年
京都府師範学校卒業
1900 年 8 月　福島県第一中学校校長
1913 年 6 月　兵庫県高等女学校長

業から脱却し、生徒の自発活動を重んじる大正新教育の空気の中で生息していたことは明らかである。

図２　和服の制服



修身や歴史、国語、英語、数学などは閉ざされた教室内でもできぬことはない。しかし西洋式ダンスや行進、また洋式の合唱や合奏が主流になった体操や音楽はせまい教室だけでおさまるものではない。通常の授業で習った芸の成果を披露する運動会や音楽会が学校行事としてはじまった。運動会の演目はくわしくわからないが全員体操や行進、舞踏の外に選手たちによるテニス等の球技の披露や提灯（ちょうちん）競争のような娯楽的なものであった。西洋式の新しい運動競技の披露という意味もあったのだろう。見物人は常に 1000 人を超えたという。音楽会については明治 42 年の第二回音楽会全 26 演目のプログラムがある。各学年全員合唱のほか、独唱、二部三部四部の合唱があり、さらにピアノ、オルガン、ヴァイオリンの独奏、合奏があって多彩である。この外、課外授業として行われた茶道、華道、絵画、書道の公開実習や展示会もあり、学習授業の外の稽古事も盛大に行われた。

こうした学校行事や課外授業を応援したのが同窓会である。明治 38 年春、第一回卒業生が催したクラスデー会が発端である。翌 39 年には同窓会総会を開き、その年の 12 月『同窓会報』第 1 号を発行した。同窓会はその後も事あるごとに学校の行事や課外授業に参加し応援した。例えば世界大戦がはじまるとわが海軍の将士に慰問袋 600 個を調製したり、関東大震災には救助活動として単衣（ひとえ）100 反、単衣

3800 枚、袴 2300 枚を縫い上げたりしたが、これは同窓生の応援あってのことである。同窓会はそのために震災救助バザーを行っている。

近郊の山に登ったり、近くの名勝旧跡への遠足は開校以来、随時行っていたが、第 1 回の卒業生が卒業直後一泊旅行をした。明治 38 年 3 月末のことで、これが当校修学旅行のルーツである。41 年 3 月、卒業直前の京都方面へ一泊旅行となり、大正 10 年から卒業学年の秋、東京方面 4 泊 5 日の修学旅行になってから以後、行く先を変えての修学旅行になった。大正 12 年 7 月終りの一週間、淡路の江井町に臨海学校を開いて以後恒例化した。いずれも女学校として先端を切ったことになる。神戸高女生の独創性を示すものであった。

当校のこの時期の特色として名士の講演がある。開校間もない明治 38 年 4 月、本校を会場として兵庫県の第一回教育会議が行われたが、この時、久保田譲文部大臣の講演があった。以後、山川健次郎、新渡戸稲造、菊地大麓、小松原英太郎文相、澤柳政太郎、槙山栄治等の文部省または官立学校長級の教育関係者が来校して本校生徒に講演した。同じ頃、大阪府立清水谷高女でも同様の名士講演が行われているので（拙著『花開く女学校』を参照）、県立神戸高女は大阪府立高女と並んで近畿地方の代表的高女と目（もく）されていたことがわかる。

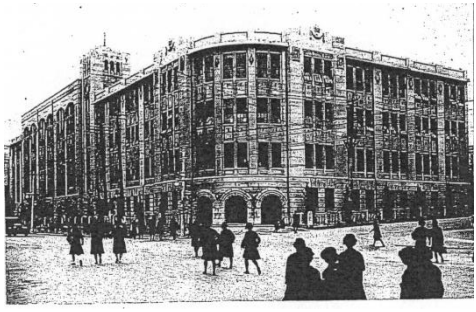
大正期にも名士の講演が続くが、大正 10 年 5 月のデンマーク女性 Estant Celt の「無銭世界一周途次講話」と題する「女子青年義勇団の仕事とその起源」の講話以降、外国人の講演が急増した。第一次世界大戦の勝利で日本の勢威が高まった故だろうか。大正 12 年 4 月には提琴家プルメステル夫妻が来校、13 年 4 月にはヘレンパーカストの来校となって新教育ダルトンプランの講演が行われた。また、日本郵船に次ぐ日本第二の大阪商船がボンペイ（インド）航路をひらき、香

港→上海→神戸の航路を開いたことも影響したのか、東洋の名士の来校が続いた。大正13年4月の黎元港元中華民国大総統来校、同年6月、インドの詩人タゴールの来校・講演、同年11月、中華民国の孫文夫妻の来校と“大アジア主義”の演説と続く。

図3　講演中の孫文

県立神戸高女は発展につれて開校以来の木造校舎が手狭(てぜま)になった。増改築をくりかえしたが、間に合わないので隣地に土地を得たので新校舎の建築となった。大正12年7月、折原兵庫県知事主宰で定礎式を行い、13年3月、鉄筋コンクリート4階建新校舎が落成した。総工費41万7千円余り、ガス暖炉付、水洗便所、合唱のための階段ステージ付講堂、外に雨天体操場もあった。

図4　完成した新校舎



開校以来、服装は綿服筒袖えび茶袴という一般女学生と変りなかったが、大正9年洋装制服を研究しはじめ、10年代はしばしば制服を変えた。そして昭和の激動期に入るのである。

参考文献『神戸高校百年史学校編』

図 5　講堂で雛祭り

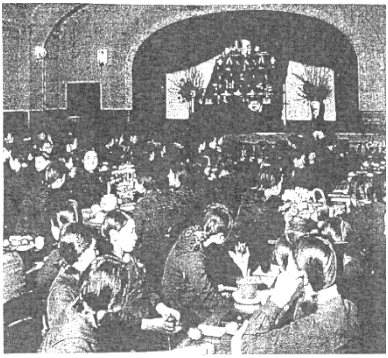


図 6　洋服の制服

制服 1

制服 2

制服 3

大東文化大学生の卒業生インタビュー
― 大東文化大学『CROSSING』2023年から ―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

最新の大東文化大学『CROSSING』2023年用から、大東文化大学生の卒業生インタビュー（6名）を紹介したいと思う。まず1人目である、千葉県教育庁勤務（公務員）の濵田耕平さん（法学部法律学科、2018年度卒）は、「自分が生まれ育った地域を住みよくしたい」という。

「自分が生まれ育った地域をもっと住みよくしたい、という思いから公務員を志望しました。就職活動においては、『就職ガイダンス』『面接対策』『個別相談』などを積極的に利用して公務員の仕事について認識を高めました。現在は千葉県教育庁で奨学金の返還に係る業務を担当しています。自分一人で決めかねることもあるため、判断に迷った時は上司への報告、連絡、相談を心がけ実践しています。来年度は異動のため部署が変わりますが、まずは今の仕事をしっかりこなし、知識と経験を積むことで次のステップへつなげていきたいと考えています」。

＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊ ＊＊＊

続く2人目となる、千葉県立磯辺高等学校勤務（教員）の松本大樹さん（スポーツ・健康科学部スポーツ科学科、2018年度卒）は、「面接の練習を重ねて『伝える力』を身につける」という。

「スポーツ・健康科学部で教員免許を取得して保健体育の教員になりました。現在、公立高校でクラス担任を務めるほか、サッカー部の顧問として日々生徒とともに汗を流しています。大学時代は部活動に励みつつ教職の勉強に取り組みましたが、経験豊かで熱心

な先生方から学んだことは今に役立っています。大東には教職セミナーや面接対策などのサポートが充実しており、私もよく利用しました。特に面接は、練習を重ねることが重要です。教員や指導者にとって最も大切な『伝える力』を身につけるうえでも、積極的な活用をおすすめします」。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

そして3人目となる、株式会社良品計画に勤務の森本絵里さん（国際関係学部国際文化学科、2019年度卒）は、「大学時代の挑戦が自分の糧になる」という。

「現在、無印良品の店長代行として接客をはじめシフト管理、スタッフのマネジメントなどを担当しています。大学では『Daito Education PLUS』の活動で、入学式や高校生とのイベントのプロジェクトに関わったことで、企画力やコミュニケーション能力、そして協働する力が育まれ、今の仕事に活きていると思います。2年次にインドネシアに語学留学したことも自身につながりました。大学時代にどんなチャレンジをしたか、それは人生の大きな糧になると思いますが、社会に出てからも同様です。将来は食品の商品開発に携われるよう、これからも挑戦し続けていきます」。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

続いて4人目である、株式会社メリーチョコレートカムパニーに勤務の浅井詩織さん（経営学部経営学科、2014年度卒）は、「お菓子を通じて元気と笑顔を届けたい」という。

「お菓子は私にいつも元気をくれるもの。就職活動も大学のキャリアセンターを活用して製菓メーカー中心に進めました。職場には大東文化大学出身の先輩も多く、さまざまな場面で力になっていただ

いています。私たちの仕事はやはりバレンタインが本番です。商品の価格やパッケージについて打合せをする中で、チームのメンバーから共感を得られたときは、勇気を持って自分の意見を発信することの大切さを感じました。社員総出の売り場づくりでは、販売店でメリーの商品を笑顔で買われていく瞬間に立ち会えることもあり、私たちの商品が元気を届けることができたんだと、幸せな気持ちになります」。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

続いて5人目となる、株式会社東京地下鉄に勤務の阿部純治さん（法学部政治学科、2019年度卒）は、「大学生活で培ったコミュニケーション能力」という。

「経済の中心地である東京を支え、社会の発展に貢献する会社で働きたいと考え、東京メトロを志望しました。現在は、電車を利用するお客さまの動向に注意を配り、お客さまの安全と安心を守れるよう、改札勤務やホーム列車監視業務を担っています。大学時代は教授をはじめ、先輩や後輩などさまざまな人と積極的に交流してきました。そうして培われたコミュニケーション能力は、仕事をするうえで充分に活かされていると感じます。将来の目標は運転士です。お客さまの日々の生活を支え、安全と安心を体現できる運転士になりたいと思います」。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

最後の6人目である、株式会社日本通運に勤務の岩山明弘さん（経済学部社会経済学科、2019年度卒）は、「『〇〇さんにお願いしたい』と思われる営業に」という。

「幅広い業種と関わる仕事がしたいと考え、物流大手の当社を志望しました。現在は国内の新規営業および既存顧客への対応を行っ

ています。仕事上で心がけているのは、お客さま目線の提案です。ドライバーとの交流を通して情報を収集し、お客さまとは一から人間関係を構築していきます。その結果、新規のお取引が成立した時には大きなやりがいを感じます。大学時代にアメリカへ長期留学を経験したこともあり、将来は海外でも活躍することも夢のひとつですが、今は国内でお客さまとの関係をしっかり築き、頼られる存在に成長するのが目標です」。

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊

大学では、卒業生らのインタビューにもあるとおり、「就職ガイダンス」や「面接トレーニング」といった就職支援プログラムを年間145回（2020年度）も実施するなどして、キャリアセンターや教職課程センターなどが窓口となって、学生の就職支援活動に力を入れている。実際に、多くの学生らがキャリアセンターを訪れていて、年間に7859件（2020年度）の相談利用があったとされる。キャリアアドバイザーや関係職員らが、いずれの相談に対しても丁寧に応じ、頼りになる存在として、学生らの満足度も高いようだ。

明治後期に興った女子の専門学校（46）
東京女子体操音楽学校―女子体育専門学校のはじまり

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

明治35年5月、東京市小石川区上富坂（現在の文京区）で、各種学校として、私立東京女子体操学校が設立された。女子が学べる最初の体操学校だった。設立者は山崎周信、賛助員に子爵松平直敬、伯爵北大路実信、跡見花蹊など33名を得てスタートした。後に日本における最初の女子体育大学となる、現在の東京女子体育大学の前身である。

28年1月に発令された「高等女学校規程」の学科目の体操は、1年生から4年生まで週3時間、5・6年生は週2時間普通体操と遊戯を行うことになっている。しかし、女らしさが求められた当時において、実際は女子の体育などほとんど重視されていなかった。ところが、明治27年7月に始まった日清戦争での死者は90％近くが病死であったことから、日清戦争勝利後、体育及び学校衛生重視の風潮が高まった。強健な国民を養成するためには、母となる女子の体育を振興し、心身ともに健康な女子の育成が必要となったからである。産業が盛んになり、小学校の就学率、女子の女学校への進学者が次第に増えた。30年代に入ると、女子体育に関心が持たれるようになり、女子の体操教員が求められていた。

明治35年4月23日付、設立者山崎周信は東京府知事に「学校設立願」を申請した。添付された設立要項の目的に、「女子師範学校高等女学校女子小学校ノ女子体操教員ヲ養成スルヲ以て目的トス」とある。課程は、6ケ月履修の本科と無期限の研究科の二科で、16歳から30歳まで、75名を募集した。本科の入学資格は、小学校准教員免許

保持者、高等女学校3年級修業者、教職経験者及び同等の学力を有する者とした。研究科の入学資格は高等小学校卒業者とした。

開校式は35年6月8日に行われ、設立者山崎周信の挨拶、校長松平直敬の告示、来賓諸氏の祝詞、終わりに東京音楽学校教授山田源一郎の奏楽にて君が代を合唱した。宴会の余興として運動場で小学生や女子運動倶楽部員による舞踏、来賓のロンテニス等の遊戯運動が行われた。この間絶え間なく楽隊がにぎやかに演奏し、空には縦横に万国旗が翻る体操学校らしい開校式であった。

開設時に借りていた独逸神学校の校舎（『写真でつづるお茶の水体育 110 年』より）

35年4月27日付『香川新報』に出した生徒募集広告には、「東京女子体操唱歌学校」というように体操と唱歌が併記されている。東京女子唱歌学校を併設する計画であったが、東京府の実地視察の結果、併設は認められず、合併して開校するよう指導された。

開設時の校舎は、独逸（ドイツ）神学校を午後だけ30円で借りたものであった。わずか2ケ月後、同年10月18日付で東京市小石川区茗荷谷町94番地に移転した。同年11月22日、私立東京女子体操音楽学校として、校名と学則の変更願を提出し認可された。木造平屋建瓦葺23坪の校舎は、監督高橋忠次郎の自宅であり、約200坪の運動場はその庭であった。

学校規則を見てみよう。

第一条　本校ハ体操及音楽ヲ教授シ女子教員ヲ養成スル所トス

第二条　本校ノ教科ヲ分チテ体操科音楽科ノ二トナシ共ニ女子師範学校及高等女学校女子小学校教員タラント欲スル者ニ之ヲ授ク但シ二科ヲ兼修スルコトヲ妨ケス

第三条　本校ニ研究科ヲ置キ本科を卒業シタル者ヲ入学セシム

第四条　修業年限ハ両科トモ六ケ月トシ研究科ハ一ケ年以内トス

第五条　生徒ノ定員ハ通シテ百五拾名トス

主な変更点は、設立当初の本科を体操科と音楽科に分け、2科を兼修できるようにしたこと。研究科は本科を卒業し、さらに高度な学術・技芸を研究する科とした。入学資格として、30歳未満などの制限を削除して入学しやすくし、定員を150名に倍増した。

学科目と時間数は以下の通りである。

体操科：倫理2　教育2　生理4　解剖衛生2　体操12
舞踏・遊戯10　1週授業時数合計32時間

音楽科：倫理2　教育2　家政1　音楽18　遊戯8
1週授業時数合計31時間

設立当初に比べると科目は簡略に整理された。国語、家政、体操に関する学科、救急療法がなくなり、体操科は、普通体操や舞踏・遊戯の術科の時間数を増大した。随意科として生花・茶・礼法が置かれたが、琴は土曜日の午後に教授するようになった。親族が直接監督するものに限り通学も可としたが、原則全寮制となった。寄宿料は半年6円、食費は50銭。

開設1年後、36年3月9日付『土陽新聞』に出した生徒募集広告に、体操科、音楽科に加えて、数学科の教員を養成することを謳い、保育も学べるとある。体操と音楽だけでは応募が少なくあれこれ苦慮したようだ。実態は不明だが、それでも生徒は集まらず、大正11年4月に郊外の北多摩郡武蔵野村吉祥寺（現在の武蔵野市吉祥

寺）に移転するまで、11回もの移転を繰り返し、その都度学則も変更している。移転は主に資金不足による経営難のためであった。当時はまだ女子の体操教師が歓迎されない社会であり、教科としての体操の評価が低かった。

明治34年4月、日本女子大学校を創設した成瀬仁蔵は、近代女性の資格条件は道徳、智識、芸能、体格の四点を兼備するところにあるとして、体操学部の設置も考えていた。しかし、時期尚早という周りの反対で断念した経緯がある。

東京女子体操学校創設の実質的な指導者である高橋忠次郎も、設立にあたって賛成する者は一人もなく、“女子が体操の教員となっても使う所がないだろう。金銭を損耗するだけだからやめたほうがいい”と忠告を受けた。しかし、高橋は頑として意志を変えなかった。『遊戯雑誌』第3巻第6号（明治37年3月25日発行）に載った「日本遊戯調査会の昨日今日」に、次のような高橋の言葉が伝えられている。

> …僕はいわゆる世に先だって憂うるものである。（略）如何にかして我国体操界の歴史の中に特筆大書は出来まいが、その幾分たりとも斯界に尽くされたということを後人をして知らしめたい。それには本邦の女子体操学校が何よりの記念碑である（略）（『藤村学園100年のあゆみ』より）

というように、金銭上の利益を得ようとして計画したのではなく、体操界に尽力したことを後世に知らしめるためであると述べている。

初期の生徒数は、明治41年2月付公文書によると、35年12月の第1期生15名、36年6月の第2期生は4名、同年10月の第3期生は11名、37年4月の第4期生は17名で、募集定員の150名には程遠かった。

参考文献

『藤村学園七十年の歩み』

『藤村学園八十年のあゆみ』

『藤村学園100年のあゆみ』

『学制百年史』文部省

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書
（16）：鳥取県議会における専攻科関係の発言（2）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号では、前号に引き続き、鳥取県議会における専攻科に関する質問と答弁を検討する。今号からは、専攻科が廃止に向かう過程を議会での発言を通して追っていく。

今号で取り上げるのは、1996（平成 8）年の定例会での松田一三による質問と教育長の答弁である。実際に専攻科が廃止になるのは10 年以上も後のことであるが、この時期にすでに廃止を視野に入れた意見が出ているという事実は注目に値する。

以下、実際の質問と答弁を見ていくことにする。なお、質問も答弁も専攻科以外の点についても言及していることがほとんどであるので、専攻科に関する部分のみを摘記したものである（冒頭に専攻科についての発言がある場合は、最初から記載している）。

○1996（平成 8）年 3 月 11 日 平成 8 年 2 月定例会（第 5 号） 本文

19 番（松田一三君） 高校教育に関連してですけれども、専攻科があるわけであります。高校の専攻科の設置は、県内に予備校がないときに、都会の予備校への入学、保護者の負担が大きいという趣旨によって始められたと思いますし、有意義にその存在価値があって、非常に大きな役割を果たしてきたわけでありますが、現在の現状では、そろそろ見直す時期に入っているような気がしているわけであります。

予算的には大した予算ではないわけでありますけれども、兼務とか、いろいろな問題もあるでしょうし、また、専攻科の性質が国公立向きで私立向きではないということもあります。また、逆説的に言うと、高校３年間は十分楽しんで、高校４年生という考え方で、その後１年間専攻科に行って勉強して大学に入るという、ある意味では高校生活を充実した意味合いにとれるわけでありますけれども、そういった点での専攻科のあり方がどうなのかという感じがするわけであります。そういった点でのお考えをちょっとお聞きしておきたいというふうに思います。

教育長（田渕康允君） 次に、高等学校の専攻科についてのお尋ねがございました。

本県では、昭和 30 年代に大学進学希望者が増加しておりましたが、非常に増加したために、いわゆる浪人を余儀なくされる生徒たちがたくさんふえてきました。都会に行って予備校に行くか、あるいは自宅で勉強するしかなく、経済的にも非常に問題が多かった状況の中で、県教育委員会といたしましては、段階的ではありましたけれども、学校教育法に基づく科として専攻科を設置したところでございます。

この専攻科の設立は、現在、設置された高等学校の教師によって、高校３年の学習をさらに深度を深めて学習指導が受けられる、いわば受験教育ということも当然考えていたわけでございますから、高校段階よりもさらに深度を深めた受験勉強ができるということ、さらに、自宅から通学できるということで保護者の経済負担が非常に軽い、さらに、高等学校の課程でございますから、高等学

校が責任を持って子供たちの生活管理、健康管理もするということで、県民に喜ばれて、現在、競争率は各学校とも約 100 人の募集定員に対して 1.4 倍程度でございます。非常に志望が多いわけでございます。

そういうことから、その成果も十分上がっているという実績が出ておりますので、現在のところ、専攻科を廃止するとか、そういうことは考えていないということでございます。

松田は、1991（平成 3）年から 2011（平成 23）年まで米子市選挙区選出の議員を務め、所属会派は無所属、信、無所属、絆と変わるが、所属していた会派はすべてリベラル系（革新系という意味ではない）のものである。インターネット上の情報であるが、2021（令和 3）年度にはかつて専攻科を設置していた私立米子北高等学校の評議員を務めている。

廃止を考えてもよいという松田の質問に対し、廃止は考えていないという県の答弁となっている。たしかに、この時期の専攻科の生徒数は決して少ないという水準にはなく、廃止を考えるレベルではなかったということはできるだろう。後出しじゃんけんのような話ではあるが、後に専攻科はもっと深刻な生徒数減に見舞われることになるのである。

専攻科の教育課程が国公立大学向けであるということは、鳥取東高等学校の事例を検討した際と同じである。松田は米子市選出なので、米子東高等学校の教育課程を見てそのように思ったのかもしれないが、学校は違えど教育課程に大きな隔たりはないように思われる。

浪人すればよいという考え方に対する疑義は、非常に興味深い。廉

価で通学できる専攻科の存在が浪人へのハードルを下げるのだとすれば、高価な都会の民間予備校に通わざるを得ないとなれば浪人を回避しようという動きが起こるという論理になるのだろうか。これまた後出しじゃんけんのような話ではあるが、専攻科の有無以前の問題として少子化の進行により浪人回避の動きは高まっていくことになる。

専攻科の廃止の論理としてはいささか弱いところもあるのだが、この時期から専攻科の廃止を求める機運が、専攻科の外側から高まっていく。この質疑の翌年となる 1997（平成 9）年 6 月 6 日には、鳥取県私立学校協会の会長である木村知己を代表とした連名で「県立高校の専攻科廃止について」という陳情が出され、長い研究留保の期間を経た後に、1999（平成 11）年の 2 月定例会で趣旨採択されることになる。

次に本会議で専攻科が質問の俎上に上るのは、趣旨採択の後のことである。その詳細については、次号以降に検討していくことにする。

（付記）本研究は科学研究費補助金（20K02435）の助成を受けたものである。

史料紹介
『校友』（松本中学校文芸部）第89号より その3
中島益男「矯風会報告書」

冨岡（とみおか） 勝（まさる）（近畿大学）

旧制松本中学校および新制松本深志高等学校の生徒自治に関連した史料として、前号・前々号にひきつづき1947年3月15日に発行された松本中学校の校友会誌である『校友』（松本中学校文芸部）第89号から史料を紹介する。今回は、1946年度に矯風会会長をつとめた5年生の中島益男による「矯風会報告書」をとりあげたい。

『長野県松本中学校長野県松本深志高等学校九十年史』（1969年、長野県松本深志高等学校同窓会。以下『九十年史』と略）によれば、矯風会は1897年に「善を勧め悪を戒むる」目的で創建された生徒自治的組織であり、相談会と並んで松本中学時代の自治の中心的組織であった。

活動内容は例えば1934年年度の場合、校内風紀係、盗難係、生活係、校外風紀係の4つの係ごとに係長と役員が取り締まりを分掌していた。また分掌班とは別に、1933年には全校20学級に委員1名ずつを配置してその学級の指導監督にあたらせる「担任」制も設けられていた。この「担任」制は敗戦時まで継続した。

1932年ごろの矯風会の主要行事は、役員会、総会、修養会（弁明会）、服装検査、五年生会（必要のあるとき）であり、年度初めの総会でその年度の「風紀取締ニ関スル決議事項」（これを「矯風会規約」と称した）が認証され、それにもとづいて役員を中心に風紀取り締まりなどが行われた。

1941年の文部省の「中等学校等ニ於ケル修練組織ニ関スル件」にもとづき、同年に松本中学校報国団がつくられた際には、矯風会は

校風部に改められ、興業物班（委員14名）、拾得物班（委員6名）、衛生班（委員37名）、風紀班（委員2名）の分掌班が設けられている。矯風会は、学校報国団の時期も「校風部」としてほぼ同様の活動が継続し、1943年度に校風部幹事をつとめた生徒の林義郎は「松中の松中たる所以は校風に在り、その校風は長い伝統に輝く矯風会並びに校風部によって鍛へられたものである」と述べている。

1945年11月の報国団から校友会への切り換えにともない、相談会とともに矯風会の正副会長選挙が行われて矯風会が復活している。1946年5月に戦後2回目の相談会・矯風会の正副会長選挙が行われ、それにもとづいて校長から矯風会長に任命されたのが『校友』第89号の「矯風会報告書」を書いた中島益男である。

なお、中島が矯風会長を任命された際、岡田甫教頭から「上級生ナル故ノ下級生ニ対スル腕力、精神上ノイカナル形の暴力モソノ姿ヲ消シ、道理ニ従フトイフ理念ノ下ニ行動セヨ。……全校ノ模範生トナッテ貰ヒタイ」という話があったという。

以上、『九十年史』をもとに矯風会の概略を述べた。ここからは中島益男の「矯風会報告書」を紹介するが、この報告書の内容を簡潔に要約すると以下のようになるだろう。

① 戦時中の学校報国団の校風部では、修養会などで暴力が見られた。これについて中島は「個性を踏みにじり自由を圧迫して来た修養会的な暴力は正に呪うべきものである」と述べている。

② 中島は、「松中生が自由に自己を延ばし得る、そうして我等の学校をして秩序ある美しい天地にせしむる」ような矯風会を目指すと述べた。

③ 1946年7月の矯風会総会で、矯風会の存廃問題が持ち上がるとともに、従来の規約事項、つまり「風紀取締ニ関スル決議事項」はすべて撤廃された。存廃問題は1946年12月に存続と決定した。

④ 衛生係の活動として、荒廃していた校舎と校庭の整備清掃が係長の生徒を中心に熱心に取り組まれた。

⑤ 1946年10月から矯風会役員が「担当」として各クラスについて下級生を指導した。

戦後に復活した矯風会が、学校報国団校風部時代から戦後の新しい松中自治を支える存在として試行錯誤していた状況を示す貴重な史料だといえるだろう。

ただし、この「矯風会報告書」は、雑誌『校友』で公表されたので、中島会長の公式見解に留まっていたかもしれない。次号は、『九十年史』を利用して、中島益男が残した『手記』を含めて、矯風会をめぐるさらに詳細な状況を紹介しておきたい。

矯風会報告書

〔略〕去年の暮、校友の盛り上る力により松中矯風会は、古き伝統を受けて、復活の一歩を踏み出した。さうして今年度の頭初、川邊君の後を受けついで、会長の大任をお引受けして以来はや一星霜なつかしの松中を後に去りゆかねばならぬ身となつた。

特に戦時中、校風部といふ歪められた形で存在した矯風会を如何にして、その本来の意義を取り戻し、如何に権威あるものとして築いてゆくか出発の第一陣を承った我等の任務は大きかった。ここ数年にわたって個性を踏みにじり自由を圧迫して来た修養会的な暴力は正に呪うべきものである。もつと明るい美しい青春の歓喜に溢れた若人の燃え立つ向上心、愛校心の結集し凝固したやうな姿であるべきである。松中生が自由に自己を延ばし得る、そうして我等の学校をして秩序ある美しい天地にせしむるものでなければならない。この内に湧き起つた松中性の意向は七月の総会にその儘現れた。同席上に於ては、前年ま

で行はれて来た規約事項は一切撤廃され、映画、演劇等の興業物の開放、興業的、拾得物風紀係の廃止等が決議された上、過去にその例を見ない会の本質についての批判が加へられ会そのものゝ存廃が論議された。そしてこの存廃問題は相談会の議事として更めて取上げられ、十二月に至つて殆ど全員の賛成を以て、存続に決定し間もなく引き継ぎになる四年生の手によつて来年度へかけて確固たる基盤に立つて活動してゆく事になつた。古き無用のものは、すべてかなぐり捨てゝ、進取、積極に進まねばならない。然し、長年かゝて養はれて来たものの中には、よい物もあるはづである。我等は先輩の残したよき制度を今の時代に生かし、善用していく事になつたのである。

衛生係は特に年度の後半にわたつて工場動員医専共学等の為に荒れ果てた校舎校庭の整備清掃の為係長石曽根君をはじめとして係員は、全校生が帰つてから遅く迄も残つて掃除の監督に、用具の整備に払った苦労は並々ならぬものがあつた。又十月以降であつたが、役員担当を各クラスにつけて、下級生の指導に尽力してもらつた。

四年五年と学制の変革の為二年間最上級生として務めた五年生はいさゝか疲労した感があつたが、大きな抱負と、高い理想の下理想の学園を築いてゆかうと真剣に考へ、真剣に行つた。下級生は総会に於ける発言も少く、未だしの感はあるが自治に対する関心は漸く高まつて来た。

下級生諸君よ。特に四年生諸君よ。我等の時代には建設の前の破壊あるのみであつた。諸君こそ新らしい松中の伝統の基を作るものである。悉くの松中生をして、その生活に悔なからしむる為真剣に考へて、真剣に行動してくれ青年の意気と純情のあふれる所、松中発展の道は開かれるものである。矯風会の健全なる発展を祈りつつ筆をおく。

体験的文献紹介(39)

― 高校教育課程の研究から中等教育史の研究へ ―

神辺(かんべ) 靖光(やすみつ)(ニューズレター同人)

東京文化高校の新しい教育課程をつくって私が高校主事になった1962年は高校生の進学率が60%を超えて各地に高校全入運動が起こる一方、男女青少年の風俗が人々の耳目を奪った時期である。アイビールックやミニスカートが街に氾濫(はんらん)し、深夜喫茶に若い男女が屯(たむろ)した。高校生もこれら大衆の例外ではない。エリート高校生観は通用しなくなっていた。こうした状況に対応して1966年10月、中央教育審議会が「後期中等教育の拡充整備について」の答申を出すのである。

高校主事(校長代理)になった私は私学会館にある東京都私立中学高等学校協会(略称中高協会)の事務局や諸会合に顔を出すようになった。これより少し前から早稲田大学を定年後、所長になった原田実先生のお招きで中高協会の私学教育研究所嘱託研究員になっていたから同じ屋根の下にある中高協会の諸会議に気楽に出席した。私学教育研究所では欧米の中等教育、特に英独仏の進学選抜について大学教授の話を聴いたり日本の中等教育の歴史を検討したりしたが、都内私立高校の状態が急変しつつあることに鑑(かんが)み、日本の現高等学校に連なる中等教育の検討に集中することにした。そのために日本教育史専攻の大学教授が招かれて懇談したが、私は現場の校長としての発言者としてしばしば名指しされた。

またこの頃、高校卒業生の進学先として高度な技術や実務を教える各種学校が次々に開校した。ハイレベルの電気技術や各種デザイン、料理等である。この各種学校の幹部教員が生徒の出身校たる高校教育の実情を知りたいと言うのである。各種学校協会→中高協会を通じて私学教育研究所に講師の要請があった。研究所は私が適任だとい

うので以後、数回にわたって、講師を引き受け、高等学校の実態についての講演を行った。私はこれらの要請があるたびに高校の実態をさらに調査したり、日本や西洋の中等教育を勉強せねばならなかった。その調査勉強に全く痛痒(つうよう)は感じなかったが、なにより時間がほしかった。

高校をとりまく状況はさらに変り、進学率は70％を超え、東京は90％になっていた。さらなる 高等学校の改革がくると予感した中高協会の幹部は私学研究所とはかって教育制度等研究会を立ち上げた。私はその一員に選ばれた。中高協会（東京都）の幹部は日本私立中学高等学校連合会の幹部を兼ねている。中高連幹部は東京の私学研究所と同じような中高連の日本私学教育研究所をたてようとその筋に助成金を打診した。日教組の講師団（左翼的教育学者が多かった）に悩(なや)まされていた文部省は中高連幹部に応じ、私学教育研究ばかりでなく私学教員の研修も行う財団法人日本私学教育研究所を認可した。研究所は八王子市郊外に土地を求めて研究室、研修室、図書館、実験室、宿泊施設完備の教育研修センターを建設した。日本私学教育研究所理事になった中島保俊氏から早速、私(神辺)に研究所教育研究室の専任研究員にならないかという打診があった。研究時間がほしい私は気持が動いたが、東京文化高校主事の大任があるので言を左右にして時を過ごした。東京文化高校では病床にあった森本静子校長が亡くなって学園常務理事であったご子息の森本武也氏が校長になった。私学経営一辺倒(いっぺんとう)の人で私と反(そ)りが合わない。またその頃、早稲田大学文学部の大槻教授から第二文学部(夜間)だけでなく、第一文学部の日本教育史と法学部の教育学概論(一般教育)の講義をしてくれとの依頼があった。ここに至って私は東京文化高校の主事を辞(や)めて日本私学教育研究所研究員になろうと決心した。その日のことである。私学協会で知り合いになった東京立正高校校長 I 氏の訪問を受けた。この4月から東京立正女子短期大学(英語英文科)を開校するから教職課

程の主任になってくれないかという打診である。秘書課程、教養課程、教職課程があり、教職課程の主任教授にＦ氏を迎えたが80歳という高齢だから神辺を助教授にして実務を担当させたいという。〝東京立正女子短大助教授を本職として早大文学部と法学部で教育史、教育学を講義する。そして日本私学教育研究所の教育学研究室で研究する〟これで念願の研究生活に入れると踏(ふ)んだので東京文化高校校長に辞表を提出し東京立正女子短大、日本私学教育研究所に応諾(おうだく)した。1966年4月から東京立正女子短大の助教授になり、新設の女子教育研究所主任を兼任したので短大で週数日を過ごし、また週一日二日、日本私学研究所に勤務した。さらに早稲田大学での講義のかたわら図書館ですごして研究生活に浸(ひた)るという極上(ごくじょう)の生活を4年間続けた。この間の論文として「実科中学校と実科高等女学校」「中学校一種二種の課程」「作業科と集団勤労作業」をあげたが（本シリーズ23・24・25。ニューズレター75号、76号、77号に掲載）。これはわたしのモノグラフであっても全体ではない。わが生涯の研究テーマになった中等教育史研究の第一歩である明治前期の中等教育史研究について述べたい。

新しい研究体制に身を置いて嬉しかったのは欲しい文献を思いのまま集められることと論文を載せる紀要が用意されていたことである。日本私学教育研究所(以後、日私教研と略称）には紀要のほかに原稿枚数制限なしの「調査資料」が用意されていた。丁度、文部省の「後期中等教育の拡充整備」に応じて中高協会と中高連が「要望書」をつくろうとした時だったので「調査資料」はそれに必要な論文を載せるものになった。またこの頃は本職の東京立正女子短大の「紀要」、古巣の東京文化短大の学誌「文化生活」、早稲田大学文学部の「フィロソフィア」等から原稿依頼があったがすべて応諾して教育史論文を書きまくった。日本中等教育史の諸課題を内包する日私教研の「紀要」「調査

資料」収載のいくつかの論文を紹介する。

これまでの体験から私は研究対象を現高等学校の前身である旧制中学校とし、その標的を教育課程に絞(しぼ)った。明治以後の近代教育史は中学校と大学の研究が遅れていて、なかでも教育課程の変遷は殆んど不明であったからである。私は「わが国近代教育課程の形成―普通科中等教育を中心に―」の題目で以下を書き連ねた。

1. 学制期：教育令期と中学校令（紀要3号、1968年）
2. 実科中学校と実科高等女学校（紀要4号、1969年）
3. 中学校一種二種の課程（紀要5号、1970年）
4. 作業科と集団勤労作業（紀要6号、1971年）

『明治以降教育制度発達史』収載の教育法令法規により、消略箇所は内閣法制局の『法令全書』で確かめ、『法規分類大全学政門』や文部省『学制八十年史』の解釈に導かれながら論文を書いた。海後宗臣編『森有礼の思想と教育政策』（東京大学教育学部紀要8、1965年）『井上毅の教育政策』『臨時教育会議の研究』に収録された諸論文から多くの示唆を受けた。

「調査資料」は「教育制度等の研究」と題して主に私（神辺）の論文を載せた。No.1「教育制度における初等・中等・高等教育の接点―大正7年の高等学校令を中心に―」1970年。No.2「中等教育における普通教育と専門教育―法規にみる明治期の普通・専門・実業教育の概念―」1971年である。前者は『教育制度発達史』のほかに『明治文化資料叢書8』収載の「帝国教育会発行教育広報」や安部磯雄編『帝国議会教育議事総覧』収載の〝議員提案〟等を参考にし、特に昭和初期の中等教育改革案については内閣審議会・石川準吉『総合国策と教育改革案』、東京帝国大学教育学研究室編『教育思潮研究』に拠ることが多かった。さらに No.3に「明治初年における東京都の私立中学校―漢学塾―」（1972年）、No.4に「同―私立外国語学校

―」（1973年）、No.5に「東京の私立中学校の実態」（1974年）を書いた。

そうこうするうちに4年の歳月がたち、私は東京文化短期大学に招聘された（本シリーズ26）。当短大の『紀要1号』に「学制期における中学校観―東京府立中学校の創立をめぐって」（1975年）を、『紀要2号』に「大学規則・中小学規則と東西両京の中学校」（1976年）を載せた。これらには『法令全書』収載の法令のほかに「府県史料」収載の「東京府中小学規則」「京都府史料政治部学校類」に拠った。この紀要1号、2号を書くに当っては倉沢剛『小学校の歴史3』に導かれることが多かった。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

何気に眺めていた、東京新聞の社会欄のコーナーである「暮らしのヒント」に掲載されていた、角田真知子さん（73歳、千葉県茂原市在住）からの投書「孫への手紙、自分史を伝える」（2022年3月27日、23面）が、私の目に留まりました。コロナ禍もあり、なかなか直接に会えないという孫娘さんらに対して、角田さんは「おばあちゃんの物語」という自分史を綴る・・手紙を書き始めたのだといいます。親しい間柄でもきちんと自分史を伝えるのは面倒だったりもしますので、なかなか興味深い試みだと私は率直に感じました。角田さんによれば、1回の便りごとに写真やイラストなども挿入して、要領よく2枚程度におさめる工夫もされているそうです。角田さんは、子ども時分歌と勉強が得意の明るい性格で、学校でもとても人気ものだったことなど綴り、いま現在は「中学時代」までお孫さんらに話しているよし。自分の「長い人生の間にはいろいろな出来事がある」といった点を、お孫さんらになんとか伝えたいといいます。そして、角田さん自身にとっても自分史を手紙として書くことによって、「忘れていた事がよみがえってくるのも楽しみ」なんだそうです。素敵な自分史が綴られることを心より期待しますね。（谷本）

京都市学校歴史博物館から『学校資料の世界 ―学校資料ガイドブック』が2022年3月に発行された。タイトルからは、学校資料について簡単に紹介したパンフレットのようにも見えるが、資料の写真や豊富なトピックで構成されていて、学校資料についての数回分の講座テキストとして使えそうなほどの充実振りだ。「学校資料ってなに？」、「なぜ郷土資料室が学校のなかにあるの？」、「子ども向けの展示はどのように行うの？」などのテーマごとに深掘りしていくスタイルになっている箇所も、講座等で使いやすそうだ。本文は同館学芸員の林潤平氏によるもので、同館元学芸員の和崎光太郎氏（東京福祉大学）による特別寄稿「学校資料の価値と魅力―醍醐小・鞍馬小の学校資料を中心」も収録されている。これを活用して各地で学校資料に関する講座や勉強会が開催されたら楽しそうだ。非売品のようなので、入手したい場合は同館に早めに相談するとよいだろう（冨岡）

会員消息

日テレNEWS（6月2日）で、香川・坂出の地元高校生らがお店から出される廃棄食材・うどんを有効活用して、「うどんバーガー」をこのたび創作調理した・・と報道されていました。高松国際ホテルの総料理長さんは、「私たちプロでは、考えつかないようなことを子どもたちは発想しています。これから、楽しみだなと思っています」と語っていました。そして、地元にとっても地産地消の「食品ロスゼロ」を目指し、秋ごろにはパーキングエリアでの生産販売を計画しているとのことです。なんとも素晴らしい挑戦ですね。

今年は都心でも、梅雨明けが例年にないほどかなり早くて、記録的な猛暑が6月中からみられました。女優の野村昭子さん（享年95歳）も、自宅にて熱中症で倒れておそらく亡くなったのではないか・・という訃報がありました。テレビドラマの「家政婦は見た！」や「渡る世間は鬼ばかり」などでも存在感があってとても印象的でした。残念ですね。（谷本）

東京のコロナ感染者数が増えたことで、対面で始まった本年度も、残すところあと数回の時に、急遽、オンライン授業になりました。連日の猛暑もあり、実はオンラインを歓迎しています。（山本剛）

今年は複数の学校で非常勤を掛け持ちすることになり、全く違う内容について教えています。前期を通じて、あるときに平安末期の荘園公領制の成立をどう説明するかを考えていたかと思えば（中学校の歴史的分野）、教育の基本的な歴史の流れを整理し（教育原理）、教育法規における教師の位置づけについての教材を作り（教職概論）とてんやわんやでした。こうした授業準備に加えて、ゼミのレジュメを切ったり、研究を進めたりしようと試みていたのですが、文献を読んでいても内容が頭に入らず、前日読んだ文献の内容を翌日になるとすっかり論理や記述箇所などを忘れてしまって読み直すような感じで、どうしたものかと悩むままに日々過ごしていました（ニューズレターへの投稿も滞ってしまっておりました）。

こうした中、前期がひとまず終わり、差し迫った授業準備の必要から解放されてから文献を読んでみると、学期中よりも断然スムーズに内容が入ってくることに驚きました。研究には一定の余裕が必要なのだ、と改めて実感した次第です。教材作成や生徒/学生の反応から教えられることも多くある一方で、研究との両立はやはり前途多難です。(猪股)

8 月 3 日、文京区小日向の旧新渡戸稲造邸跡地を偵察してきました。新渡戸が明治 36 年ごろから亡くなる昭和 8 年 10 月まで 30 年間住んだ家です。1,472 ㎡の敷地にあった純和風の建物を改築して、明治 43 年に 27 室もある 2 階建洋風の大邸宅が建てられました。第一高等学校（現東京大学教養学部）や東京帝国大学の学生はじめ、内外の友人知人、身の上相談の見知らぬ人まで毎日大勢の人々が訪れました。札幌農学校時代からの友人内村鑑三が招かれた時、あまりの豪華な「御殿」に驚き、「身分不相応、彼の為に心配する。」と宮部金吾に書き送ったほど。新渡戸の意図は国際交流の場となるようにということでした。事実いろいろな会合に提供しました。

建物は昭和 20 年 5 月 25 日の東京大空襲で全焼しました。長い間国有地となっていましたが、数年前に民間会社が土地を購入し、現在 4 階建てのワンルームマンション 65 戸の建設が進んでいます。地元住民が「小日向の環境を守る会」を立ち上げ、建設反対運動を起こしましたが、コロナ禍で話し合いが十分に行われないまま、工事が進められたようです。来年の 3 月末完成予定となっています。

新渡戸が第一高等学校の校長に就任したのは明治 39 年 9 月。1 年生に「倫理」の講話を通して、それまでの「弊衣破帽・籠城主義」の校風を変えて、「人格を磨き紳士たること、ソシャリティの大切さ」を教えようとしました。博識で情感あふれ、ユーモアに満ちた談話はたちまち学生たちの心をつかみました。しかし、一方で反発する学生もいました。大正 2 年 5 月 1 日、一高を辞任することになり、新旧校長の迎送会と晩餐会の後、全校生 1,000 人が校門まで見送り、500 人ほどの学生たちが雨後の泥道を、小日向の邸宅まで送りました。玄関で新渡戸夫妻を前に、この日のために学生たちが作った送別歌をうたい、二つの花籠を送りました。矢内原忠雄が代表して「一つは造花で永くは持つが香も生気もない。他の一つは生花で新鮮な色香はあるが数日で凋落するであろう。しかし、我々の思慕の情は生花の花籠のように新鮮で、造花の花籠のように永久にあせないであろう。」と述べ、ツツジの花籠を贈りました。メリー夫人が後に生花のツツジを庭に植え、翌年みごとに花を咲かせました。ツツジの英語名の「アゼリア会」と名付けて、子弟は毎年 5 月 1 日に集まりました。

このようなエピソードがある新渡戸邸です。せめて文京区教育委員会が再び「旧新渡戸稲造邸跡」の案内版を立ててくれるように、盛岡の新渡戸基金とともに見張っていきたいと思います。（長本）

ワンルームマンション建設
が進む旧新渡戸稲造邸跡

建設反対運動の横断幕（隣家）

７月に2回、松本深志高校を訪問して松本中学校友会・松本深志高校生徒会の雑誌『校友』を閲覧しました。戦前期の『校友』は10年近く前に同校へ何度も通って調査しましたが、戦後の『校友』も、戦後における生徒の自治についてどのような試行錯誤が行われたのか知ることができて興味深く感じます。ただ、こうした史料を、ぱっと見ただけでは面白さを十分に感じることは少ないように感じます。リストをつくってみたり、重要な箇所を手で書き写してみたり、このニューズレターで少しでも紹介したりちょっとした分析をしているうちに、面白さが何倍にもふくらんできます。時間はかかってしまいますが、こうしたプロセスを踏んでいると楽しさを感じます。色々な仕事や用事で時間を捻出するのは簡単ではありませんが、史料を閲覧するだけでなく、ニューズレターを通じてあれこれ活用する時間を楽しみたいと思っています。

前回もお知らせしたとおり、9月3日（土）に長野県松本市の旧制高等学校記念館で夏期教育セミナーが開催されます。コロナの状況にもよりますが、今のところ対面で実施される予定です。（映画上映以外については、事前申込みにより、ZOOMで参加することも可能です）

詳細は、同館ウエブサイトの「イベント案内」をご覧下さい。

イベント案内 | 旧制高等学校記念館 (matsu-haku.com)

旧制高校や高等教育に関心をもつさまざまな方々との出会い・再会の機会として、心から楽しみにしています（冨岡）

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。